

中村素堂

中平解先生はまことにもの静かな方である。しかし私はそんなにたびたびお目にかかつてはいない。というのは、私はこの短歌会随一の怠け者で、めったに例会に出たことがないからである。

ただ毎号の誌中から、いかにも先生らしいお歌をうれしく拝見させていたでいてるので、お目にかからない割りには、お親しくしているような気分がするのである。

ご専攻の語学方面のことは、何にも存じ上げていないけれど、こんどお出しになられた歌集を拝見していると、芸は人なりで、一見異状なほどに言語学的執心のお深くいられるのに驚く。時々これが歌集であることなどをうっかり忘れて、ここに出てくる固有名詞の珍しさに惹かれ、そのどんな物かに興味をそそられ、風景の中に置かれてる草の花などの想像にふけてしまふのである。

いや風景の中に置かれてる——のではなく草の背景として風景があるいは心の動きが、時が添えられているようにさえ見えるほど、私どもの乏しい知得の中には全くなかった草の名が多く出現する。

特に草の名と書いてきたが、木の方に珍しいものはほとんど出てこないで、珍しいのは草の名ばかりである。そしてまた動物としては虫の名が断然多い。最も多いのが、どうも、「ひぐらし」であるようだ。これも虫の次は鳥、鳥も小鳥で、大きくても尾長くらいまでである。

そして言語学者としての先生ご自身も、これらの固有名詞に大変惹かれ丹念に博搜しておられることが、その歌の裾に付けられている。名詞の註やまたおもしろい言葉を探し求めていられるらしいお歌が散見するので、名詞への興味というか、言葉への研究心というか、とにかく珍しく耳新しい名詞に惹かれつつ、作歌せられているようなお姿が目映るのである。

しかし、それが前述のとおり多くは草花や虫や鳥であって、食べ

物とか動作とか、その他人間の生活の中にあるもろもろの方言などにわたるものは、皆無ではないかも知れないが、これもまずないといえるほど少ないのである。

そこで先生の日本語における特別のご趣向が、可憐な野草の花、実のたたずまいなどと、手近な野鳥、声を持つ小さな季節の虫などに特に深くあらわれて、みずからその愛情の故にその知られざる方言的な呼称にまで、ご関心を持たれておられるのではないかと、勝手な拝察をするのである。

またその可憐なものへのいとおしみが、先生の大切な作家動機となつていふようなものを、私はどの頁からも感じとられ、先生の持つておられる非常にうちわな表現の中にひそむ、これらのものへの愛撫のような柔軟な詩境にひき入れられてしまふのである。

歌の世界におられる方々は、この淡々たる詠み口の歌についても、いろいろのお言葉はあると思うけれど、実は私はこの歌集『武蔵野』五百首は、このような詩境を、ひとつのはっきりした特質とする一巻の短歌集なのではないかと思う。

そして当然のことながら、あのもの静かな学究であられる先生の風貌もおのずからみごとに描き出されているように思うのである。

人間はみずからみんな自分の世界を持って、その好みの愛惜の中に詩心をゆすられたり、その信念のよりどころの故に感情をあらわにしたりして、言葉を借りれば、それがそのまま詩世界の珠玉となつてゆくのであろう。

誰でもが持ちそうな世界のものを歌い、ありふれた心情の表現を歌っていても、それはそれではやりのバスに乗っていけるひとりとなることもできるようであるが、先生のように新も古も流行も人間も忘却して、一切独自のこの箇有の世界を耕して、珍しいひとつの成果を得られたことに、さぞかしお喜びを感じつつあられることと、私も一隅からご祝いを申し上げるものである。

〔筆間雑記〕中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。
へ『たかむら』昭和四十一年七月